

編集後記

皆様こんにちは。梅雨の真っ只中とは思えない連日の快晴、真夏日が続いていますが、いったいどうなっているのでしょうか。

さて、今回の特集は「緑内障の臨床検査：最新情報」です。私の編集後記は、いつも40年ほど前の入局時との比較になってしまい恐縮ですが、今回もそのスタイルでお許しください。

私が入局した頃の緑内障検査といえば、Goldmann 圧平眼圧計による眼圧測定、隅角鏡による観察、3面鏡を用いた視神経乳頭の観察が基本でした。ところが、いつも先輩方の記録と一致せず、悩んだ記憶があります。さらに、診断がつかない緑内障疑いの患者さんには、シェッツ眼圧計(Schiotz tonometer)や入院での飲水負荷試験、終夜眼圧測定、そしてクーゲル視野計(Kugel perimeter)による検査が行われ、ときに機器を壊してしまい、視能訓練士の先輩に怒られながら検査したものです。

つまり当時の緑内障検査は、「職人の勘と経験」に大きく依存しており、医師、視能訓練士、患者の間に生まれる「阿吽の呼吸」が診療を支えていた時代でした。OCTという言葉すらなく、視神経乳頭の読み取りや陥凹の程度は、すべて観察者の眼力にかかっていたのです。緑内障が視神経疾患か、乳頭所見を比較した論文も数多くみられました。

そんな時代を経験してきた者にとって、現在の検査技術の進化は驚異的です。眼圧はもはや「一時的な数値」ではなくなり、Home tonometerにより患者自

身が朝夕の変動を記録、それがクラウドを介して医師に届く——そんな未来を、40年前に誰が想像できたでしょうか。

視野検査も大きく変貌を遂げました。いまや自動化され、imo や GAP のように両眼開放や注視追従機能を搭載した機器が登場し、中心視野や微細な欠損の検出にも対応。定量的な比較が可能となり、患者の「見えづらさ」がより正確に可視化されるようになりました。

前眼部診断においても、AS-OCT により非接触かつ高精度な断面画像が得られ、前房構造を定量的に把握できるようになったことは、臨床の質を一変させた出来事でした。

そして、OCT の存在感は言うまでもありません。2000 年代初頭によく普及し始めた OCT は、いまや高解像度・高速撮影が当たり前となり、AI による画像解析やノイズ除去が進化し、OCT angiography によって血流までも描出可能になりました。視神経障害を「構造」と「循環」の両面から捉える時代に入りました。

振り返れば、40 年前は「静止画の診療」、そして今は「動画的理解」が可能な時代です。あらゆる情報に時間軸と個性が付与され、遠隔地からのアクセスも可能になりました。緑内障診療は、機器の進化とともに、より「人」に寄り添う医療へと歩みを進めています。

次の40年には、どんな変化が待ち受けているのでしょうか。ぜひ、この目と耳で確かめていきたいと思っています。(石川 均・記)

編集：後藤 浩・飯田知弘・雑賀司珠也・門之園一明・石川 均・根岸一乃・福地健郎
編集顧問：小口芳久・臼井正彦・澤 充・谷原秀信・岸 章治・飯島裕幸・坪田一男・富田剛司

「眼 科」 第67巻 第7号 7月号

2025年7月5日発行（毎月1回5日発行）

定価 3,300 円（本体 3,000 円＋税 10%）

年間講読料金

定価 48,950 円（本体 44,500 円＋税 10%）

〔年間 13 冊（臨時増刊号を含む）の誌代〕

〔年間予約購読者に限り送料無料〕

発行所 金原出版株式会社

発行者 福村直樹

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-31-14

Tel 03 (3811) 7165 [編集室直通]

Tel 03 (3811) 7184 [営業部直通]

FAX 03 (3813) 0288

www.kanehara-shuppan.co.jp

振替口座 00130-1-191269

印刷所 横山印刷株式会社 Tel 03 (3622) 6161

広告申込先 (株)文京メディカル 03 (3817) 8036

・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権（送信可能化権を含む）、貸与権、二次的著作物への利用に関する原著作者の権利は、金原出版株式会社が保有します。

・**JCOPY**＜出版者著作権管理機構 委託出版物＞

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（TEL：03-5244-5088, FAX：03-5244-5089, e-mail：info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。